

検証・露伴と熊本

登尾 豊

幸田露伴はよく国内を旅行し、紀行文集『枕頭山水』(博文館 明26・9)を残しているが、同書に入れていない紀行文もあり、その後も旅を重ねている。彼が一步も足跡を残していないのは、山梨・岡山・鳥取・島根・徳島・高知・愛媛・佐賀・大分・宮崎・沖縄の十一県にとどまるのではないかと思われる。当時の交通事情、出張や転勤のない彼の職業を考えれば異例であろう。九州にも一度やって来て、熊本県を駆足で通過している。小文では、その際の紀行文によって熊本県内における露伴の足跡を辿ってみたい。

明治二十三年四月(日未詳)、露伴は饗庭篁村^(註3)・中西梅花^(註4)・高橋太華^(註5)と四人で京阪をめざして上野駅から旅に上った。いわゆる根岸党^(註6)の気楽な物見遊山の旅である。横川で汽車を降りて西へ向かい、木曾路を外れるところまでを露伴は「乗興記」(『大阪朝日新聞』明23・5・18〜6・5)

として書いているが、日附はない。この旅行は京阪を見物して終ったかというところではなく、突如へ五月六日」という日附で始まる「まき筆日記」(『枕頭山水』に初出)の旅につながっている。途中で篁村と別れ、京都に何日滞在したのか分からないが、梅花とも京都で別れて、この日太華と二人で有馬温泉をめざして京都を出発した。紀行文の題名は有馬の名物巻筆に因む。

有馬温泉に五泊して、五月十一日に神戸に出、船か汽車で東京へ帰るつもりであった。しかし、へ四時半神戸に着きて、名物なればと大塊の牛肉を下物^{さかな}に土地がらの美酒を頻りに仰ぎ飲みける。うちに二人とも気が大きくなってく

る。
へ此のまゝ帰ることやあるべき、一道を行くも旅行なれば八道を行くも旅行なるべし、今帰りたればとて一月二月後れて帰りたればとて細君^(註7)の頬も膨れず母公の髪も白くはなるまじ、囊中の置^{とほ}しきは心の弱みなれども他の人々

よりは二人とも忍び力強ければ、由無き君がすゝめによりかゝる憂きめに遇ふやうになりぬと啣ちがましく他を恨まむことは絶えて無からむ、されば、またといひては面倒なり、直ちに此地より舟に乗りて彌次郎兵衛喜多八がせしごとく一度は金毘羅にも詣り厳島をも一覽し、九州の地をも次を以て踏み置かむ

と相談がまとまって、夜の八時発の船に乗った。いわば酒の勢いで彼の唯一度の九州旅行が実行されたのである。懷中に不安はあつても思い立ったら実行するのが若さであり、また行き当りばつたり旅行を延長しても何とかなるほど宿代等も安い時代だったのである。

金刀比羅神社（香川県）、厳島神社（広島県）を経て、五月十五日朝九時頃、二人は馬関（現・山口県下関市）に船で到着する。

翌十六日夕方五時頃（三保丸）という船で博多港に着き、九州に第一歩を印し、宮崎宮参拜、市内見物をして、へ海容館」という五階建の宿に泊った。

十七日午前十時二十分発の汽車で博多を発ち、太宰府を見物して、午後三時四十五分に汽車で久留米に到着した二人は、その先はまだ鉄道が通じていなかったたので羽犬塚（現・筑後市羽犬塚）まで歩いて泊った。

五月十八日は露伴たちが熊本県に入った日である。朝七時半に熊本市（明治二十二年四月一日市制）をこの日の目的地として徒歩で出発し、へ南の関といふ少しく人家あるところにて昼餉を食べた。現在の国道二〇九号を南下して途中から現在の国道四四三号に入ったのであろう。へ一本久留米より熊本に出づる其路三條あり、三池を過ぐるもの本道にして我等が取りしは徑路の一つなり」とその日の日記（紀行文「まき筆日記」）にある。三條のうちのもう一つはたぶん現在の国道三号であろう。彼らの選んだのは正にへ徑路（近道の意）であつた。南関の様子は、土地の人たちの話によると、へ都て生活の度低くて粗野なる様子なり。職人の中には何処にても何時にても最も高き賃銀を得るものなる大工すら、此地にては一日十七錢より多くは得がたき由なれば、其他は推して知りぬべし」と貧しい印象であつた。

午後四時頃、高瀬（現・玉名市高瀬）に着き、へ足を傷めたれば人力車を雇つて熊本をめざす。途中、田原坂では茶店に休んで西南戦争の話を聞いたり、弾痕を見たりしている。へ八時熊本に着し、旧城内を通りて洗馬町に宿かりぬ。熊本城はへ掘り繞らしたる塹深く、屈曲出入して築き上げたる石壁高く、物知らぬ我等が眼にも天晴金湯の堅めかな」と俚の上から眺めて通つた。この日、十二時間半、

へ十八里(約七十二キロ)の行程であつた。

この日は朝から暑く、南関に着く以前にへ炎熱極めて烈しく太陽燉々と頭上より照らせば、道の小砂利もきらめき渡りて眼前に輝き、おもしろき眺めも無くて興乏しき途を苦みばかり多くなしぬ」といふありきまで、しかも足を痛めもした。へ此日我は暑に中りて」といふことになり、「まき筆日記」に引用されている太華の道中記なるものによれば、へ前日少時同伴となりたる売薬商に売りつけられたる、効能あるべくもあらぬ諸毒消丸とて熊本より発売せる丸薬を服して宿に在る。

太華は比較的元気で、晩飯後、へ二本樹といふ九州に名高き遊廓を見に出かけたが、へ頓て面白からざりしやうの容貌をして、朝鮮飴を買って帰ってくる。へ朝鮮飴と赤酒は此地の名物にて共に味わるからぬものなり」とあつて、後年、酒を飲めない夏目漱石が「三四郎」のなかで赤酒を下等な酒としたのとは違う評価を下している。

当時の熊本市は、城を中心とする極く狭い区域であつた。東から時計まわりに黒髪村・大江村・本荘村・春竹村・本山村・古町村・春日村・横手村・島崎村・花園村・池田村・清水村に囲まれた範囲で、黒髪村以下池田村までが市域に編入されるのは大正十年六月一日、清水村は昭和十四年八月一日に編入された。その狭さに加えて、西南戦争による

町屋の焼失、人口の減少などからまだ立ち直っていないくて、繁華の地とはいいがたかつたろう。太華がうかぬ顔で帰つて来たのはもつともである。

翌五月十九日は朝六時起床、へ足の痛みは異らねど頭の重きはやゝ薄らぎたり」であつたから、朝食後へ直ちに車を僦ひて此地を立出で、花岡山を右に見て川尻の町に着き、緑川を越えて宇土に至り、宇土より松橋といふ船つきの淋しき町に至りつきぬ。熊本市には夜の八時に着いて翌朝出発、ただ通りぬけただけであつた。

へまめなれとあだ名はたちぬたはれ島よるしら波をぬれ衣にきて、と大江の朝綱がよめる風流島は、此途中の緑川の末にある小島なりとぞ、見ねば如何なるところか知らず。清原元輔など此国の守となりたるには似ず歌名所も大國の割合には少きところにて、音にきく鼓の龍も、此地より船にて薩摩に渡らんとするなれば、芦北郡を経るよしなきまゝ見るに及ばず。八代の池もその如く、宇土の小島は尋ねしも知れず。あしきたの野坂の浦に舟出してみしまに行かん波たつなゆめ、と長田の王の詠じ玉ひし野坂の浦も知るべくもあらぬに、此國に來ながら此國の名所一つも見ずして過ぐるごとよと笑ひながら、肥後近き薩摩の米の津まで舟を僦ふべく言い定めける。と熊本以南もひたすら先を急ぐ旅であつた。

松橋は、天草や県南の海産物、後背地の米、雑穀、林産物の集散地として栄えてきた。現在の下益城郡松橋町松橋の大野川沿いの岸辺には倉庫が並んでいたという。しかし、明治二十八年一月松橋駅（宇土郡不知火町にある）、翌二十九年十一月小川駅が開業して九州鉄道株式会社線の線路が延びて来ると、鉄橋が架かって船の出入りが不自由になり、また物資の輸送を鉄道に奪われ、しだいに港町、宿場町としての機能を失って行った。

露伴たちが来たときには、松橋はまだ港町であった。そこで二人は舟を雇うのであるが、舟のへ長さ四間にも足らざるべき。小ささが彼らを不安がらせる。

へ水烟り森々として島山遠く蜿蜒たる外には眼を遮るものもなき此灘^(註26)をかゝる船にて渡らんこと、父母あるものなすべきこと歎と少時怪み迷ひけるが、旅人は皆これにて渡る習ひなりといふに、いさゝか心強くなりて遂に乗りこみたり。く

船出してへ初めは風乏しくて船の行くこと極めて遅かりしが、少時して強風起こりければ樋島^(註27)天草上島の間を避け、へ石灰焼けるなど見ゆる迫門^(註28)を出ではつるころはいより、よきほどに風蓬々と吹き出し、順調な旅となった。帆かけ舟の旅であつたらしい。

へ水股^(註29)の沖を過ぐる頃太陽西の方に沈めば、雲は赤金の

色なして輝き、浪は熔けたる鉄の炎焰^(註30)をあげて流るゝが如し。く

と夕暮を迎え、へおもしろの眺めかな、歌も及ばじ画も及ばじと賞歎しているうちはよかつたが、日は急速に暮れた。

へ漁火もかつ見えず、行きかふ舟に逢ふこともなき海上の孤舟にて、鳥羽玉の闇き夜に入りたる何となく心細く、我が吸へる煙草の火の唯一点此闇の中に赤く見ゆるなど、詩興として自らをかしと思はざるにはあらねど、実は少しく愴然として物言ふことも鮮くなりゆきたり。く

この夜の海上での心細さ、愴然たる思いは、翌年の「いさなとり」^(註30)の彦右衛門の漂流の場面に生かされていると思われる。少くとも、彦右衛門を夜の海に押し出したとき、露伴の胸にこの夜のことが蘇つていたとは言えるであらう。

このあと、船頭のへまでどこか分らない海岸に船を乗り上げるなどのこともあつて、夜更けてようやく米の津に着くことができた。露伴たちは二日で熊本県を通過したのである。

米の津・川内と泊つて五月二十一日夕方に鹿児島市に着、二十四日の夜、船で鹿児島を出発。二十五日午前十一時に長崎に着き、市内見物をして夜また船に乗つて、二十六日午後一時に博多に着いた。三時に再び出港したが、乗客の刃物沙汰があつたので博多港にひき返すというアクシ

デントがあつて、二十七日の朝五時に改めて馬関へ向けて出発した。長崎では「新々長崎土産といふ書」を手に入れているが、他にも書物を買つたかもしれない。それらによつて、あるいは老岐・対馬・平戸周辺での捕鯨の事を知つたかもしれない。それが後の「いさなとり」の構想につながつたと考えられる。

九州を去つてから大阪・京都で人に会い、太華とは京都で別れて箱根に寄つて先に別れた篁村に会い、東京に帰り着いたのは六月二日である。一ヶ月以上の長い旅であつた。

露伴の熊本の旅は、通りぬけただけの急ぎ旅であつた。しかも南半分は海上から眺めただけである。後年、熊本を小説の舞台とすることも熊本について書くこともなかつた。最初から予定されたゆっくりした旅であつたなら、違つた結果になつたかもしれない。

注

1、汽車や船、人力車も利用しているが、徒歩旅行も多い。国外に出たことはない。

2、山梨県には行つたのではないかとも思えるが、「知々夫紀行」の旅（明治三十一年八月）で秩父からの雁坂越

を断念して以来、甲州に行つた記録は見あたらない。広島・山口県には行つているのに岡山県に入っていないのは、小文で扱ふ旅行の際、船で瀬戸内海を往復しているからである。

3、安政二（一八五六）年—大正元（一九二二）年。小説家、劇評家。

4、慶応二（一八六六）年—明治三十一（一八九八）年。

小説家、詩人。

5、文久三（一八六三）年—未詳。編集者、伝記作家。

6、根岸派とも言うが、根岸近辺に住む文士を中心とする交際仲間であつて、文学結社ではない。老若よくうち連れて小旅行をしている。のち、楽々会と称する。

7、露伴はこのときまだ独身。

8、現・玉名郡南関町関町。北隣の福岡県山門郡山川町に北関という地名がある。

9、どこかで地図を手に入れていた可能性がある。この三つのコースの件、玉名郡内を歩きながらの「経が嶽、聖徳寺山、吉次嶺、那知山と連々聯りたる山々の玉名郡と山本郡飽田郡より区画せる」という記述は実景と地図とを照合しながらのことではあるまいか。（各山については未詳）。

10、翌日の日記に「足の痛みは異らねど」とあるので露伴

がそうであったことは確かだが、大華も多少はそうであったかも知れない。

11、現町名・橋名は「船場」と書くが市電の停留所名は「洗馬橋」である。両方があったと思われる。城下へ客や荷駄を運んだ馬を一日の終りに洗う場所であったろう。その近くには旅籠が集まっていたはずであるが、露伴は宿の名を記していない。

12、ヘシヨドクケシガン」と訓む。吉田松花堂（新町四丁目。文政年間創業）で現在も製造販売している。

13、ヘ二本木」が正しい。京町にあった遊廓が西南戦争で焼失したため、明治十年八月、鮑田郡古町村二本木に移転開設。東雲楼のストライキは明治三十三年のこととされる。

14、六年後に第五高等学校教授として来熊した漱石が借家に入っている。明治二十九年五月十六日附横地石太郎（松山尋中学校時代の同僚でのち校長）宛書簡に「当地非常に家屋払底にて漸くの事一週間程前敗屋を借り受候へども」云々とある。

15、後出の風流島のこと、別名たばこ島とも言う。宇土市住吉町の住吉神社のある岬の先にある、岩礁のような小島。

16、「後撰歌歌集」巻十五（新国歌大観番号一一二〇）。作者名は「小宰相」と記す。へ女のあだなりといひければ」との詞書をもつ。新編国歌大観では、初句を「まめなれど」とする。

17、延喜八（九〇八）年—永祚二（九九〇）年。歌人。三

十六歌仙、梨壺の五人の一人。「後撰和歌集」の撰者の一人。清少納言の父。天元三（九八〇）年従五位上に進み、寛和二（九八六）年、肥後守となった。

18、未詳。

19、未詳。八代郡鏡町鏡村（JR鹿兒島本線有佐駅の西北方）の印鑰神社の鏡ヶ池をさすか。

20、前出のたはれ島（注15）のことと思われる。

21、芦北郡芦北町芦北の西の海。

22、水島。八代市金剛地区に水島町がある。現在は島ではない。

23、「万葉集」巻三（新国歌大観番号二四七）。へ長田王被遣筑紫渡水島之時歌二首」の内一首。現在はへ野坂の浦ゆ」と訓む。「夫木和歌抄」巻二十五には、題しらず、読んしらずとして収める。

24、現・鹿兒島県出水市内。

25、明治三十二年十二月には三角線が全線開通した。

26、露伴はこの海を天草灘と書いているが、誤りである。

不知火海、八代海であって、天草灘は天草下島の西の海である。

27、現・天草郡龍ヶ岳町樋島。島の名前である。

28、天草上島の姫戸町に石灰岩を産し、石灰工場がある。

29、水俣のこと。

30、新聞『国会』に明治二十四年五月十九日から十一月六日まで連載。